

最新中国激光聚変研究事情 ～上海、成都、出張記～

高部英明

【本出張記は筆者がレーザー研の5名と1月13日から17日まで、上海、成都の2箇所の研究機関に出かけ、共同研究の打ち合わせに臨んだ際のものである。会議の内容より、目で見た最新の中国事情に焦点を当て、気付いたままに書いた。全体を調整する時間がなく、少しくどい表現もあると思うが許されたい。02. 1. 30】

正月早々から日中拠点大学交流協定(日本側のスポンサーは学振)に従い、上海、成都の激光聚変(「レーザー核融合」の事)の視察を兼ねた4泊5日の出張に出かけた【地図1】。レーザー研6人の団体旅行。メンバーは実験が山中センター長、中塚教授、田中教授。理論が三間教授、長友助手、そして私。1月13日(日)の10時発の上海行き、全日空便。朝、6時起き。「はるか」で出かけた。関空に着いてANAのBカウンターに来たら三間、長友両氏が長い列の先頭部分にいた。そこで、「いやー、遅れてごめんなさい」と声をかけて合流させていただいた。チェックインを済ませる。中国のお金「元(イェン)」は上海でないと交換できないようなのでそのままパスポート・コントロールを済ませて中に入った(1元は16円程度)。

9番ゲートで北ウイング。時間があるので、VISAカードのラウンジ「六甲」に行って、オレンジ・ジュースとコーヒーを飲みながら、読みかけの本「中国人という生き方～ことばにみる日中文化比較～」(田島英一著、集英社新書83、2001年刊)の残りを読み終えた。著者は上海に学生時代に留学。奥さんを現地調達したという62年生まれの慶応大学総合政策学部助教授。中国の四字熟語が各章の節のタイトルになっており、その熟語から起こして中国人の国民

性を色んな角度から説明している。大変面白く、今までの疑問が氷解したところもあった。今回の訪中に際し、中国人との接し方に大いに参考になった。

長友君から朝日新聞の天声人語に電通大の植田さんの話が載っていたと聞かされていたので、新聞を買い、読んだ。重力波検出用高精度レーザー製作の話。「10年前、余りにも難しいと皆研究から手を引いた。ところが、逃げ送れた私が現在、それを完成させようとしている」のような話。目先の有望さで研究投資を決めてはだめだという教訓の例に使われていた。国立天文台のTAMA300というシステムのことである。確かに、今年度から特定領域研究が動き出し、今や「重力波の検出、世界一番乗りでノーベル賞を」という機運がある。

上海までは2時間30分。飛行機は最新鋭のB777。液晶テレビで香港の映画を見た。時差が1時間あり(中国内は全て同じ)12時前には浦東国際空港(99年10月に開港した新空港)に到着した【地図2】。天気は曇り、気温17度。温かい。ゲートからドンドン外国人が降りてくる。急速に発展している中国経済特別区、上海の躍動を感じる思いがした。パスポート・コントロールにも人の列。そこまで歩く間に垣間見た廊下の大きな広告の右下に「製作者だれだ

れ」と署名があるのに気が付いた。先ほどの本に書いていた「中国人は個人主義、起業家精神旺盛」など。「そうなんだ。これも一つの作品で、個人を売り込むのにも使われているんだ」と勝手に解釈した。

荷物も長々と待たされることも無く、直ぐに出てきた。さすが最新鋭の空港である。出口には三間さんの知り合いの余（ユー）さんと載（ダイ）さん夫妻が迎えに来てくれていた。駐車場のバンに乗り込み高速道路を40分くらい走った。空港からホテルのある市中心の浦東新区は、天安門事件後遺症に悩む92年にトウ小平が訪れ、有名な「南方講話」によって改革開放政策の全面再加速に移行し、経済優先の一声でできたという新ビジネス地区である。空港からホテルまで、高速道路の建設やビルの建築などラッシュであった。中塚さんが「経済が傾きかけた日本人には、ねたましいような光景だね」と。ビルの建築工事の足場が面白い。日本だと鉄パイプで足場を作る。こちらは「竹」だ。どんな高いビルも竹を継ぎ足して足場を作る。さすが中国。

途中、ユーさんが高速道路建設途中の足場のようなコンクリートの列を指差して「これはリニア・モーター・カーの支柱なんだ」と教えてくれた。そういえば、ドイツの国鉄（DB）と日本のJR（だった気がする）が競争入札し、結局ドイツに決まった、とずいぶん前に聞いたことがある。中国との経済協力に関して、日本はドイツに比べ後手後手に回っている。車の生産に関してもそうだ。上海には中国とフォルクス・ワーゲン（VW）の合弁会社があり、SANTANAなどをライセンス生産している。97年に北京に行った際、その話は聞いていたし、実際、北京で「上海ナニナニ」と漢字書きし

たVWを沢山見た。後で聞いた話だが、90年頃、中国政府から日本の自動車メーカーにも合弁会社をつくらぬかと打診があった。ところが、日本の会社は輸出で稼いだ方が実入りが大きい、と断ったそう。結果として大損だ。何年先を見るか、「先見の明」の問題だね。

上海市内は曇りとのことであつたが、一面の霞は「スモッグ」である。車も多いが、工場の煙であろう。ホテルに着いてチェック・インを済ませ、2階のレストランで昼食を取った。回転テーブルに色々な品物が乗る。みんな、箸をつけてみたが大変美味しい。これから、私と長友君以外はダイ夫妻の案内で市内見物。長友君は商社勤めの義理の弟が近くに駐在しており、彼の案内で市内へ。私は、母が11歳まで住んでいた住所「北海寧路・保原坊」を訊ねる。ユーさんに話したら「場所を知っているから連れてってあげる」となった。「貴方は公務で来ている。これは私のプライベートな事なので、場所さえ教えていただければ、あとは一人で探せます」と、お断りしたのだが、「気にしないで良いから」と一緒に来てくれた。母は、祖父が設立した会社が上海の日本人租界地（現在の虹口区）にあつたため、上海事変（32年）や第2次上海事変（37年）などで上海の治安が思わしくなくなる頃までここに住んでいた。生まれたのは仏租界の家で、その後、もう一回引っ越した後、ここに11歳まで住んでいた。私は小さい頃、上海の話をよく聞かされた。母に住所や近くで目印になる建物など思い出すままに聞いてきて、それを頼りに探すつもりで来た。

意外にも、タクシーに乗り、ユーさんが指示して、何か運転手としきりに会話した後、

着いて見ると、降りたところが「北海寧路」の起点だった。まずは、道路標示の前で写真をとった【写真1】。この通りは「海寧路（ハイニンル）」大通りの直ぐ裏手で、いい雰囲気のところだ。往復2車線の道路の両側には日本租界時代に建てられたと思われる3-5階建てのアパートが並んでいる【写真4】。入口など、母の子供の頃の写真で見たような雰囲気のものだ。上海は結局、上海事変などの地上戦はあったものの爆撃は受けていないため租界地は昔の面影をそのまま残しているようだ。

100メートルも無い「北海寧路」をゆっくりと歩いた。母が思い出すかと、いたるところで写真を撮った。家の在った「保原坊」はどこなのか。ユーさんに色々な人に聞いてもらった。地元で古くから住んでいる人は少なかった。ようやく知っている60年配の婦人が教えてくれた。しかし、その一角に昔の母の家は無く、今は郵便局の大きな車庫になっていた【写真3】。母が日本海軍の陸戦隊基地があつて云々、とも言っていたので「Japanese Marine Base」が在ったところを知らないか聞いてもらったら、その婦人が、この横さ、と示したところは現在、中国海軍の司令部になっていた【写真2】。

この短い通りに面する古い建物を写真にたくさん収める。母は写真を見て幼き頃を思い出してくれるだろう。30分も感傷に浸ったか。日本人租界時代の大通り「四川北路」を交差点の歩道橋の上から写真に取る【写真5】。そこを歩いて、30年代の賑やかでモダンな租界の風景を想像する。ユーさんには憎い日本帝国の爪跡のはずである。私は太平洋戦争やそれに至る経緯も含み、数々の読書をした結果、中国への日

本陸軍を中心とした侵略行為は謝罪すべきであると思っている。そこで、日本の侵略行為を個人として謝罪した。ところが彼が言うには「そんなこと気にしていません。上海に育った私には、租界のお陰で現在の中国の最先端に行く上海がある、とむしろ誇りに思っています」と。私を気遣うの半分、本音半分の返事のようにであった。

虹口地区には魯迅を記念した公園があり、その近くに、日本風の雰囲気を残した「多倫路文化名人街」という通りがある。ここは、20年から30年代にかけて魯迅やその文学仲間が住んでいた地区。タクシーで向かう。タクシーは初乗り10元。ほとんど10元で行ける。いい雰囲気の通りで、魯迅が日本でお世話になった内山ダレダレの名がついた本屋などが在った。この本屋は高校、大学の教科書の専門店、英語のテキストや問題集が沢山ある。この国が英語教育にいかにか力を入れているか想像できる。ここで、面白半分に、微積分の数学の教科書を22元で買った。

「北海寧路」の名前が載った地図を探すのと、娘に頼まれた日本の漫画「ヒカルの碁」の中国版を買い求めて本屋にタクシーで移動した。大きな本屋が在り、地図は見つかった。また、租界時代の「昔日上海」という3ヶ国語の説明文（中国語、英語、日本語）のある写真集があつたので母のお土産に買った。ところが、漫画が無い。店の人に聞いて近くの小さい店に行く。通りの売店にスモッグがこびりついたビニールに入った「進藤ヒカル」の顔が見えた。「これだ、これだ」と喜び買った。10元。「ヒカルの碁」（中国の題：「棋魂」）だけでなく色々な日本の漫画を紹介している月刊誌だった。印刷の質は大変良くカラーも多

く綺麗だった。満足。

この後、母が「当時、24 階建てのビルが出来て、とても有名だった」と言っていたので、「まだあるかなー」と言ったら、ユーさんが「多分あれだ」とタクシーで連れて行ってくれた。「南京大路」という上海のメイン・ストリート沿いの国際飯店 (Park Hotel) がそれであった【写真 6】。今も立派に使っている。もういい時間になっている。皆と 6 時にホテルのロビーで待ち合わせている。

ユーさんとの話から少々。年齢を聞いたら 51 歳だという。ということは、まともに文化大革命 (66 年～76 年の 10 年間) の被害を受けたはずで、それとなく聞いてみた。「10 年間、20 代の貴重な時期に田舎の農村で働かされました」と答えた。知識人を「下放」と称して田舎に追いやり農作業に従事させる。76 年に毛沢東が死去。四人組が逮捕され、トウ小平の一声で終結した文化大革命。現在中国に大きな影を落としている。我々が接する中国人研究者に 40-60 才の世代は少ない。この世代は高等教育を受ける年代に文化大革命を前後に挟んだ世代である。ユーさんのように復帰できた人は大変稀である。強靱な忍耐力と素晴らしい頭脳の持ち主であろうと感心した。彼は、10 年程前、独ダームシュタット工科大学のピーター・ムルザーの所に居た。海外生活を 2 年半ほど経験している。「ピーターは 20 年前の私のミュンヘンでのボスだ」と言い、彼の事など面白おかしく語り合った。

ユーさんが三間さんを知っている理由を聞いて驚いた。2 年程前、レーザー研の三間グループに 2 ヶ月間いたのだそうであ

る。全然、知らなかった。何度かレーザー研ですれ違ったかもしれない。

ホテルに戻ると、私たちの受け入れの責任者である林 (リン) さんが来ていた。中国側 4 人と日本側 6 人で、浦東新区 (高層ビル地区) のアジアー高いテレビ等の展望レストランで夕食となった。橋を渡り「バンド」という川沿いの公園を通り、新区へ通じるトンネルで向かう。

このトンネルがハイテクだ。無人運転で 10 人も乗れば一杯になるワゴンに乗り、向こう岸に向かう。トンネル内は光の渦。宇宙をイメージした点滅する光のアーケード。途中からグリーンや赤のレーザー光線が舞う。次はガラス・ファイバーを 3 次元的に配置した光の雲に囲まれた地点。最後は青から紫色のアーケードだった。片道 20 元。

テレビ塔「東方明珠塔」の展望台にエレベーターで登った。高さ 350m 地点。スモッグで景色は近くしか見えない。この後、263m 地点にある回転展望レストランでバイキング形式の夕食を取った。しかし、冷めた食事が多く余り美味しくなかった (中国滞在中、ここだけがまずかった)。ビールも昼に続いて生ぬるく、うわごとのように「cold beer, please」と言ったのだが、聞いてもらえなかった。この展望レストランはテーブルのある部分が 2 時間で一回転する。

食事中にダイさんの奥さんと話した。彼女、英語がとても上手である。四川省の出身で、大学の英語学科で勉強したそう。ダイさんと結婚し、現在は化学関係の会社で営業を担当している。外人相手が多いから、英

語を使い慣れている様子。私が北京に行った時、読んだ本に、中国は都市戸籍と田舎戸籍があり、田舎戸籍の人は上海のような都会に勝手に来ることは出来ない、とあった。そこで、「貴方はダイさんと結婚したので上海に来ることができたのですね」と聞いたら、「その通り。結婚していなかったら私の場合、上海に住むのは絶対無理 (absolutely no)」と。悪乗りして「もし、今、離婚したらどうなるの」と聞いた。「大丈夫。もう居住権を獲得しているから上海に住み続けることができるのよ」だって。

上海もそうだが、後の成都に高速道路で入る時も気付いた。中国人は皆、写真付きの身分証明書を持っている。国内移動用のパスポートと考えればよい。大都市に入るにはこの身分証明書を出さないといけない。このようにして、浮浪者や職を求める農村部の人間が、近代化を急速に進める大都市に入るのを防いでいるようだ。この国は、香港返還に際し「One country, two systems (一国二制度)」を国家標語にしていた。返還後の現在も中国人が香港に行くにはビザが必要とのこと。驚いてしまう。香港だけが例外ではなく、実情は「One country, several systems」のように私には思える。共産主義という一党独裁の政治体制の下での経済自由化だから出来る離れ業である（これも中国四千年の知恵か？）。やはり、まだ民主主義の議論は早いようだ。

彼女に中塚さんが「中国の女性は皆、職業を持っているのか。働いているのか」と質問した。彼女が「ほとんどそうね」と。「何故、働くのか。義務なのか」と中塚さん。彼女が返答に困った様子だったので、私が「You hope to be mentally independent of

your husband?」と、口を挟んだら、彼女「I have to be independent of my husband」と強く答えた。中国女性は独立心が強いと本にあったが、それなのか。よく分からない。

食事を終えてもう一度展望台から景色を見たら、先ほどより良く見えるようになっていた。理由について中塚さんと議論した。私の説は「夜になって、地表が冷めてきたから、重いスモッグの微粒子が地表近くに降りてきて、300m 近い展望台の景色が良くなったのだ」というもの。中塚さんは「逆転層がドウタラ、コウタラ」と言っていた。地上に降りてみると高部説を裏付けるように、ひどい霞が掛かっていた。「どうだ」という感じで中塚氏を見つめる。「ということは、スモッグの層は地上高々300m くらいしかないのだ。地表近くは風も弱いで、なかなか流されることも無く、地を這ってどんどん広がっていく」。たまたま、帰国した日の朝日夕刊の一面に NASA が撮影した 1 月 11 日の中国大陸の衛星写真があった【資料 3】。タイトルも「中国全土を覆うスモッグが韓国、九州に移動してきている」というものであった。もはや、このスモッグは人ごとではない。

タワーの下には研究所のバンが迎えに着てくれていた。ホテルに戻り、この日は明日の準備を少しして寝た。とても良い一日だった。

1 月 14 日 (月)

朝 7 時 20 分に目覚ましで起きる。ホテルの窓から見た光景を写真に撮る【写真 7, 8】。写真 7 の左側に昨夜食事をしたタワーが見える。8 時 30 分に迎えのバンが来

る。今日訪れるのは中国科学院の上海光学精密機械研究所（略称：上海光机所、英語名称：Shanghai Institute of Optics and Fine Mechanics）【写真9，10】。所員1万5千人の研究所。というよりも、工場だそう。精密光学の各種機器を作って売っている。ここには構成員130人の激光実験グループがあり、中国のレーザー核融合発祥の地。64年にグループは発足。「激光」とは中国語で「レーザー」のこと。8時30分には林（リン）さんと余（ユ）さんがホテルに迎えに来てくれていた。高速道路は大変快適。研究所はホテルのある中心街から離れ、その北東、上海経済特別区の境に近い嘉定（ジャーデン）区中心地の清河路という繁華街の390号（番地）にある。途中から、中国で最初に出来た高速道路（テストを兼ねて造った？）を20kmほど走った。40分ほどで研究所に着いた。

研究所の門を入れて直ぐの所に、中国風の枯れ山水の庭のある会議場が用意されていた。10時半の開始まで、研究所の副所長が2人来て名刺の交換をした。2人とも大変若い。太くて背の低い彼は38歳。レーザー研に3年ほどいたセン君の同級生で、学生時代はルームメイトでもあったとか。会議は10時半きっかりに始った。中央に古風な椅子と机のある部屋で、それを取り囲むように50人ほどの人が会場を埋めた【写真11】。午前中は山中、中塚、田中、三間が喋ったところで11時45分になり、皆、逃げるように会場から出て行った。どうも、厨房があり、そこにオワンを持って行き、飯を注いでもらい、自分の部屋なり外なりで食べるようだ。食堂は無い。その飯を注いでくれる時間が11時30分から12時30分の間に限られているようで、だから足早に出て行ったのだろ

うか。

本来は、長友、高部も午前中に済ませるはずが延びた。例のバンに乗り、5分ほどの所に昼食に出かけた。なかなか立派なホテルで2階に個室レストランが多数あり、その一つに昼食の会場が用意されていた【写真12】。まず、冷たい皿のもの。そして、温かい皿。大変美味しい。大きな淡水魚のから揚げも美味しかった。ビールも程々に飲んで、舌が回るようになる。食事は日本側6人に中国側10人くらい。2つの卓を囲んだ。食事も終わり、1時半からは場所を激光実験棟【写真16】に移して、見学から。パネルは電光パネルで新しい。始めに「神光（シングァン）」と筆書きがある。1986年春とあり、署名がある。当時の国防大臣（退役将軍）で書が有名な方の筆だそう【写真17】。そこから続いて研究グループの組織などが図解してある【写真13，14】。運営委員会の委員の名前も全員書いている。リンさんがリーダー。

その隣の部屋には2年前に完成した神光IIの20分の1模型が展示してある【写真15】。これを使ってレーザーの専門的なことを色々説明していた。この模型。横にスイッチがあり、それを押すと中国語だがレーザー装置の説明をしてくれる。こりゃ便利だ。神光IIは8ビーム。最終のレーザー口径が20cmくらい。レーザー室に防塵服に着替えて入った。靴はブーツ風でレーザー研のよりずっとモダンだ。4本がバンドルで2本の長い真空パイプが目立つ。直径1mくらいで長さは20mもあるか。スペシャル・フィルターだそう。ターゲット・チャンバー室は壁の向こうにあった。なかなかモダンなつくりだ。チャンバーは2つあり【写真18】。一つが対称照射の

球形のもの。直径 1.5m。色はパステル・カラーでクリーム色。シルバーの金属部の色と上品にマッチしている。その手前に太い円柱形状の第2チャンバーがある。これはX線レーザーや基礎実験に使っている。こちらを使う時は大きな反射鏡などを指定の位置に置いて光路を代え、光軸合せをしなければいけないので、1ヶ月くらい掛かるそう。

あと、短パルス・レーザーを見学し、3時からの討論の時間となった。実験棟の会議室にすでに20人くらい集まっている。まず、長友君が喋ろうとして途中でパワー・ポイントがうまく行かず、私が代わった。まず、中国語で挨拶した。持参の「地球を歩こう No. 97: 上海」の最後の方に「旅の上海語」という頁があり、そこから「こんにちは。始めまして。私の名は高部です」と引いてきた。音にすると「ヌンホウ。ツーツーチーミン。ショウチョウ・タカベ」である。何度か練習してスラスラと喋った。だが、何の反応も無い。シラケタ感じ。気を取り直して英語で喋り始めた。晚餐の際、理由がわかった。研究所の研究者は外部から来ている人が多く、上海語は30%も分かれればいほうだとのこと。それを知らずに、上海語で挨拶した私を皆は「日本語の挨拶か？下手な英語か？」とでも思ったことであろう。

楽しく30分ほど喋らせていただいた。多分、聞いている人には、「レーザー宇宙物理」なんて何のことやらと面食らったことであろう。リンさんが「宇宙物理の人の反応はどうなのですか」と聞いてきたので、私と宇宙の14年の関係と、特にシミュレーションをやっている宇宙物理の研究者が大いに興味を示している事実を伝えた。今

回は「レーザー宇宙物理」と「レーザー核物理」の英文レビューを一部ずつ持参したので、リンさんに差し上げ、「興味ある人はコピー取ってください」とアナウンスした。

そう、この会議には昨年1月のヒルシュック会議(オーストリア)で会ったセン君が来ていた。彼はガルヒンのMeyer-ter-Vehnの所に2-3年いた30代の研究者。今度は秋からボツヘム大学に1年間行くのだそう。いい御身分ですこと。彼からは陽電子生成の論文別刷りをもらった。

私の後、長友君が統合コードの話をし、4時から45分間。「ワークショップ」という名の研究交流の計画打ち合わせを行った。まず理論に関して。議論の結果、平成14年度についてはワークショップを行うことが決まった。ユースさんの提案で、水墨画の世界で有名な景勝地、桂林で今年の11月頃開催予定。それと、リンさんの提案で長期にはコード比較をする。コード比較に関して私は2度経験がある。最初は独MPQのMeyer-ter-Vehnの要請でガルヒンの実験でX線輻射輸送に関するMULTIコードとの比較を行った。2度目はBodnerに依頼されて米国NRLのAndy Schmitの爆縮コードによる高利得爆縮のシミュレーション比較を行った。共に、その記録はレポートなり論文なりにはなっていない。とにかく、コード比較のように互いにやり取りしながらの作業では、どちらかが忙しくなると立ち切れになる可能性が高い。従って、始める前にどのようにまとめるかも議論して進めるべきだと注文した。また、対象として日、中それぞれの実験を一つずつ取り挙げて、その2つを両方のコードで解析し

比較する。違いが出れば（もちろん、出るだろう）、物理モデルについての議論を行う。面白い。実験は既に論文化されているものでもよい。加えて合意したことは、長期交流として、JSPS などに応募し若手が長期にレーザー研で研究できるようにする。

実験、レーザー技術についても議論がありほぼ方針が決まった。現在の学振では日本から中国へは理論、実験それぞれ 30 日人の経費が出せるそうである。桂林のワークショップが 5 日なら 6 人が行ける(?) のだそうなの。

4 時 45 分きっかりに終了し、例のバンで晚餐の会場に向かった。通勤渋滞の時間だろうと思うのに高速道路はとても快適に走れる。聞いたら、上海ではまだ自家用車の普及は充分ではない。市民が車を買おうとすると大変高い税金を取られるそうだ。だから、高速道路の下一般道は、この時間帯は超満員のバスや自転車で混み合っている。北京に行った時、自動車が増えすぎて、ある幹線では「偶数(奇数)日はナンバーの数が偶数(奇数)の車のみ通行可」という新交通規制が出来たと聞いた。このことを話したら、上海でもある特別な区域では同じだそうだ。

車中、リンさんに彼自身のことについて質問した。年は 59 歳。80 年頃、合計 2 年半ほど英国のラザフォード研究所にいて、Mike Key や Willi などと一緒に研究していた。ちょうど、私がミュンヘンにいた頃だから会議で顔を会わせたことがあるかもしれない。

今日はセントラル・ホテルにあるレストラ

ン(飯店)で晚餐である【写真 19】。この飯店は先の APEC 会議が上海で開催された時、小泉首相が晚餐に訪れた所だそうである。上海中心街、ホコ天の南京大路に近いホテル。4 階の個室に案内された。当然、円卓で、すでに冷たい皿が 5 つほど乗っている。中国側はリンさん、ユーさん他 2 人。まず、山中センター長が中国側の暖かいもてなしに対して謝辞を述べ、三間さんも謝辞を述べ、プレゼントを渡し乾杯となった。蟹の珍しい刺身。温かい老酒で乾杯だ。自家製のビールもあった。良く冷えてそうだったので飲んだ。美味しい。上海に来て昨夜から「cold beer がほしい」と何度も言っていた。ようやく、冷やしたビールにありついた。

ドンドン食事が運ばれてくる。びっくりしたのは「スッポン料理」。美味しいのにびっくりした。ウエートレスも日本人にできているようで、日本語で「スッポンです」と。上海は上海ガニでも有名。淡水の毛ガニである。ゆでた上海ガニの腹の部分の身がきめ細かく確かに美味しい。甲羅は手のひらほどもない小さなカニだが、ガイドブックによると一匹、200 元(3 千円強)するそうだ。飲むほどに、酔ってきて、馬鹿話に花が咲く。横に座ったユーさんといろいろ話をした。

宴の終わる頃、「私に一言喋らせてください」と申し出、「ユーさんに助けてもらい母が 11 歳まで住んでいた家の場所を見つけることが出来ました。このことも含め皆さんに感謝いたします」と。いい所だったので今度来た時はここで晚餐をと思い料金表をもらった。その中に 2 月 11 日が旧正月の大晦日、仲間と食事をしよう、という案内があった。10 人でイクライクラ、

と言うような記述だ。この夜には花火が上がったり、大変賑やかになるそうだ。

ホテルにバンで帰った。9時前で、このまま寝るのは惜しい。長友さんと9時半にロビーで待ち合わせ、市内の南京大路に歩いて行くことにした。

歩いて南京大路の起点に出てきた。ここまで10分くらいか。まだ開いている店もある。道も明るく、若者がたくさん歩いている。特に危険を感じることも無い。店をひやかしながら歩く。お茶の専門店に入ったら2種類のお茶を「飲んでみてください」と出された。2番目のウーロン茶がとても美味しかったので買うことにした。50グラム35元。先の本に「中国では値切るのが当然で、それがビジネスのイロハ」と書いていたので値切ろうとした。所が、日本人観光客に慣れている店主から「これはまかりません」と言われた。100グラム買う。70元。いい値段だ。その場で真空パックしてくれた。

途中から歩行者天国になる【写真20】。マクドナルドやKFCなどはまだ開いている。南京大路の中心地点の第一百貨店を過ぎ、さらに歩いて、陶器屋で茶器セットを買った。これは半額に値切った。帰りに、装飾品や陶器を置いた小さな店があり、そこで長友君が茶器セットの値段交渉を始めた。私は娘にメノウの腕飾りを買うことにした。目の前で「これ、メノウ。ほら、ガラス切れる」と、ガラスに疵をつけてゆく。

気に入った色があったので一つ買うことにした。値段は120元。「ディスカウント」と言うと。「OK」と電卓を持ってきて0.8

を掛ける。96元。「No. Expensive」というと。「Say how much you want」と来る。

「50元」と言うと。目を丸くして「No. No.」という。「じゃ、やめた。バイバイ」と帰りかけると。「Wait」と、電卓をまたたたたく。80元だ。「No. 60元」と、答えると。

「75元」と来る。「No. 70元」と返す。少し押し問答して、70円でイエスとなった。ところが払う時、また電卓をたたき、「72元」と言ってくる。「この2元は税金なの、いいでしょ」という感じで返してきたので、もう面倒くさくなって「OK」と、72元で買った。確かに物は良かった。買ってよかったと思った。2つ買っても良かったな、と。

この間に長友君は立派な茶器のセットを買っていた。もう夜は11時前。大通りから少し入ったところにコンビニがあったので、私はショウコウ酒と中国風ビーフ・ジャーキーを買って、その足でホテルに帰った。この大通りに面して一泊160元から240元ほどの値段のホテルもあった。

ホテルに帰り寝る前にテレビをつけたらNHKのBS1とBS2が映る。たまたま、大河ドラマ「利家とまつ」のBS1での再放送(夜10時45分から?)をやっていたので見ることにした。とにかく、中国は何処でもたくさんの衛星放送を見ることが出来る。チャンネルも1-38まである。Channel-V(3ちゃん)では、一日中、日本、韓国、中国(香港、台湾含む)、アメリカの現代のポップをやっている。日本だと今回の旅行中、SMAP、Kinki-Kids、安室や私の知らない人など。日本人はアジアの人に見られていることを意識すべきでしょう。こんな状況に比べ、アジアの盟主を目指すと意気込む日本が余りにも欧米以外のアジアの現代文

化に鎖国状態であるのが気になる。などと考えながら眠った。

先日、日本のテレビで聞いたこと。小泉総理がこの一月、ASEAN 諸国を歴訪した。その際、マレーシアのマハティール首相に「ASEAN と日本の経済関係の緊密化を図りましょう」と小泉総理が述べたのに対し、マハティール首相は余り色好い返事をしなかった。というのも、その1, 2週間前に中国の要人が訪問し、ASEAN と中国の経済関係の緊密化の話をしたところだったとか。日本に比べ中国の方がマーケットとして魅力的なのが現実かもしれない。

1月15日(火)

朝、8時20分にはチェック・アウトを済ませた。2泊で15%の税金込みで1300元(一泊約1万円)。部屋がツインで、かつ、クイーン・サイズのベッドであったことを考えると安い。ホテルの中国名は上海大廈。四ツ星ホテルだ。元々、イギリス人が34年に建築した「Broadway Mansions Hotel」である。内部は綺麗に改装されており、とても快適だった。ユーさんがバンで迎えに来てくれていた。空港は今度は古い方の虹橋国際空港。意外と近かった。

空港に着いてチェック・インを済ませ、50元の空港使用料を払いゲートに進んだ。時間があつたので、絵葉書と切手(外国は50元)を買って、母とFischerさんに書いた。Fischerさんからはクリスマス・カードをもらい、ベルガ(婦人)が11月の第2週に手術をして、その後が痛むと書いてきた。ベルガの持病の腎臓だろうと思う。とにかく、少しでも早くよくなるように願っていると書いた。構内でポスト(深い緑

色)を見つけ、出した。

雨が降っている。飛行機まではバスである。乗ったのはエアバス。空港内でもエアバスを多く見かけた。5年前来た時に読んだ新聞「Daily China」の経済欄に、中国は2016年までに、国内交通手段として航空機を2000機購入の予定で、Boeing と Airbus がしのぎを削りサービス合戦を演じている、とあつた。どうもAirbusが一步リードしているように思える。やはり、ドイツを中心とするヨーロッパとのつながりの太さに比べアメリカは覇権を競う潜在的な競争相手だからかもしれない。欧州外交のしたたかさであろうか。

飛行機は時刻通りに離陸した。「驚くべきことに」というのは時代遅れの感想であろう。驚異的な経済成長を遂げる中国では、現代の哲学は多分「時之銭」であろう。上海と成都の距離は1800km。地球の約1/20飛ぶことになる。地理学的には時差は1時間ほど在るのだが、地政学的には時差がなく、北京と同じ。着いた成都空港は昨年出来たばかり。総大理石張りの巨大な空港である。荷物も直ぐに出てきた。私の経験の範囲だが、世界中で一番早く荷物が出てくるのは中国である。皆さん、既成の概念は捨て去りましょう。中国は今や急成長しているのです。

空港にはレーザー研の西村グループに昨年末まで1年間留学していたミャオ君が運転手付きのバンで迎えに来てくれていた。研究所のある綿陽(ミョンヤン)市まで約200kmを移動する【地図3】。長友君にreconfirmationをお願いしている間に小さい売店でCDを探した。現代中国の音楽で、帰って車で聞けるようなものを選ん

だ。あまり無かったが「永遠的麗君～再見我的愛人～」と書いたCDがあり、垢抜けた女性の顔であったので買った。25 元。後で車の中で見ていたら、英語が書いてあるではないか。「Eternal, the best of teresa teng」と。「なに。テレサ・テン。おー。彼女ではないか」。私が中国奥地の成都に来て「これにしよう」と決めたのが、95 年に亡くなったテレサ・テンだった。奇しくも 53 年生まれ。私と同じだ。

早速、今回、中国道中の漫才相手の中塚教授に話したら、偶然にも「昨夜、ホテルの売店で買ったCDがテレサ・テンだった。同じだ。でも、僕のは10元だった」と得意顔で言う。「10元なんて。まがい物天下の中国だから、きっと中塚さんの買ったのは普通のラジオ放送をCDにした違法商品に違いない」と憎まれ口をたたいた。

これからのスケジュールは、成都市中心から南東 20km ほど離れた双流（空港がある地）から市の外周道路を右に回り、北にある高速道路に乗る。中塚さんが以前来た（7 年程前）時は高速道路は無く、広いが舗装してない田舎道を 3 時間以上走ったそうだ。今日は途中にある「三星堆」という 3000 年前の遺跡の博物館を見学の後、研究所のある綿陽市に向かう。市内を通る時、信号無視にも近い乱暴運転が乗っている我々には冷や汗もの。皆そうなのだから乱暴ではない、普通なのだ。良く事故が起こらないものだ、としきりに感心する。

やはり、ひどいのはスモッグである。車でこんなにひどくなるはずはない。後で聞いたが、安い石炭が原因だそうだ。工場などが未だに石炭を使うため、常時、霞がかかった状態。視界は 100m くらいだろうか。

街路樹などの葉っぱも白く埃をかぶったままである。市内を抜ければ少しは晴れるかと思ったが、一向に晴れない。本来は東を除く三方を高い山々に囲まれた綺麗な風景が霞の向こうに見えるはずなのに、道路わきしか見えない。車は時速 120km ほどで高速道路を走る。

高速に入り 1 時間ほどで「三星堆」に着いた。ここは、黄河文明が北東部に生まれた頃、漢民族とは全く異なる民族が今から 3000 年ほど前に栄えていた遺跡。時代は周王朝が始った頃である。遺跡はほとんど祭礼のための墓の跡で、おびただしい数の青銅製のマスクや人形などが最近発見されている。最初に見つかったのは 30 年代、農民が見つけた青銅器であったようだ。米国人の学者により近代的遺跡調査が進められ、現在も調査は続いている。最近、高さが 4m もある竜の形の枝を持つ青銅製の木の作品が見つかった。その巨大レプリカが博物館の中央吹き抜けに展示されている。実物も見た。

博物館では近くの大学の英語科の学生という女性が丁寧に説明してくれた【写真 2 1】。大変綺麗な英語であった。博物館を出て、お茶休止にした。喫茶店に入るとお茶の値段が高い。50 元もする。どんなお茶が出るのだろう、と言っていたら、前の舞台上で楽器演奏を始めるようだ。琴や胡弓、笛、後ろには大きな鐘を吊り下げた打楽器。その横に、薄い石を吊るした打楽器がある。昔の服装に着替えて、7 人ほどが 2 曲ほど演奏した【写真 2 2】。

もう外は暗くなりかけている。5 時半頃、ここを出た。スモッグはまだ追いかけてくる。高速道路から霧の向こうを見ても、大

きな工場のようなものは余り見えない。成都市の工場が使う石炭の灰がこんなところにまで来ているのだろうか。もう 100km は北に来た。スモッグにしては色が白い。所々で、焚き火のようなものを見つけたので「これ、本当は山の向こうで焼畑農業をしている、その煙じゃないの」と私が言ったら、「お前は馬鹿か」と、中塚さんに一蹴された。

「中国に来てから、猫を見ないね。犬も見ないね」。「やはり中国人は机と椅子以外の 4 つ足を全て食べてしまうのだろうか」。「そういえば、鳩もいなかったね。鳩は昨日の晚餐に丸焼きが出ていたよね。食べた？ 美味しかったよ」。などと話していると、アヒルの群れがいた。たくさん揃って家に帰っていくところだった。まさに、アヒルの学校だ。

綿陽市に着いた。暗い中に電気が赤々と点いている。電気関係の会社とおぼしき新しいビルが沢山見える。さらに、中心街に来ると電光イルミネーションの山だ。「きっとここは電気が安いんだ。Las Vegas のようなもんだ」など。後で聞いたところでは水力だそうで、kWh 当たり 3 円と安い。市のはずれの山の上からサーチライトで輝く場所が見える。車はその方向を目指して山道を登り始めた。山の中腹に立派なホテルがあった。ここが今晚の宿泊所の「富楽山国際酒店(Fule International Hotel)」である（三ツ星）。

ロビーには、昨年暮れ、賀（ホェー）さんの跡を継いで National High Tech Committee（中国の慣性核融合国家プロジェクト）の議長に就任した張（ザン）さん始め、綿陽にある中国アカデミー工学物理

研究所の面々 15 人ほどが出迎えてくれていた。チェック・インを済ませ、荷物も部屋に置いて夕食となった。別棟にあるお堂の形の建物に食卓が用意されていた。まず、ザンさんが歓迎の挨拶。山中センター長がお礼の挨拶。晚餐の開始。お酒は地元の有名な酒（アルコール分 52%）と、この地の有名なワイン。この有名な四川の酒は中国四銘酒の一つ。確かに美味しかった。とても小さいグラスについてくれるのだが、途中で乾杯を何度かさせられた。この酒が気に入ったので学生の土産に買った。高かった。食事のほうも大変デリシヤスであった。

私の横に座ったのはハン・セン・ペン。綿陽のレーザー核融合グループのリーダーで西南化学物理研究所の副所長。食事中に彼から聞いた話。64 年に中国のレーザー核融合研究がスタートしたことは上海のパネルに書いていた。大物科学者、ワン・ガンチャンが 64 年のノーベル賞をレーザー発明の 3 人が受賞したことを受けてレーザー核融合研究をスタートさせた。ワン氏は元々、原子核物理の研究者で、研究者としてソ連のドブナで加速器を使った研究をしていたことがある。3 年程前、93 歳でなくなったそうである。

スモッグの原因についても聞いてみた。やはり石炭を工場で使うのが原因だそうだ。「何とかしないのか？」と聞いたら、現在政府が工場のエネルギー源を石炭から天然ガスに替えるように指導しているとのこと。天然ガスはこの近くには無尽蔵にあるそうなのだが、これに切り替えるには工場のインフラの再整備が必要で、まだ時間が掛かるそうである。

帰国して、客員教授で来ている Bill Hogan (米国リバモア研) から聞いた話。彼は 83 年にレーザー核融合プロジェクトに移る前は天然ガスの液化プラントや LNG 輸送船事故の研究などをしていた。彼によると、天然ガスを最初に実用化したのは中国だそうで、2000 年前のこと。竹のパイプで家庭にガスを引いた。ところが、大都市の工場などに天然ガスを引こうとすると太いパイプラインが必要になる。これが大変だそうだ。さらに、高度な技術も必要だそうで「中国にその技術はない」と彼は言っていた。近い将来、中国が天然ガスに切り替えるのはそう容易なことではなく、かなりの投資を覚悟しないと出来ないだろうと。

料理にはスッポンのスープにスズメくらいの鳥が丸々、入ったものがあった。頭からかじってやった。腹に何か詰め物をしていたようだが、何かわからない。センター長が「これはスズメか、ツバメか？」と聞くが「いや違う。この近辺の鳥だ」。何かの山鳥のようである。上海ガニと同じ形のカニが出た。ここで取れたのか、と思ったが「上海からお前達と同じ飛行機に積まれてきたんだ」と。本当かな？ 大きな魚も出た。近くの湖で捕れるそうだ。

9 時頃、食事も終わり、私は町の様子が見たく、タクシーで 10 分程の綿陽市中心街の見物に出かけた。ミャオ君ともう一人若い研究者が同行してくれた。橋を渡ったところで降り、大通りを歩いた。大きな新しい百貨店がある。店はほとんど閉まっていたが、町の中は正月(2月12日が旧正月)前でアーケード状の電気の飾りや、花火様のネオンなど、とても明るく安全に歩くことが出来た【写真23】。歩行者天国を歩

き、人は既に少ないが、所々に開いている売店に寄り、娘に見せるための中国漫画を買った。まだ、この地には日本の漫画はたくさんは来ていない。それと、中国では劇画はまれで、四コマ漫画などが主流のようだ。

アメリカ文化はしっかり浸透している。マクドナルドが何軒か営業していたし、KFC (ケンタッキー) も数軒見かけた。面白いところでは「Playboy house」があった。一般に外国語を中国語で書く場合 2 通りの方法があるようだ。ケンタッキーのように音を当てて「肯德基」と書く。もう一つは、意味にかなう漢字を当てる場合(音は全く原語と異なる。日本語の「会議」などはこの例だ)。プレイボーイの場合は後者で、漢字を見て笑ってしまった。「花花公子」と書いていた。何ともうまい当て字ではないか。

その他、教えてもらったことなど。中国銀行は外貨専門。日本銀行に相当するのは中華人民銀行。確かにお札にはこの銀行の名前が書いてある。今、中国は WTO (世界貿易機構) に加盟しようとしている。加盟のためには、極言すれば経済システムをグローバル・スタンダードに近づけなければならない。そのために、「独占の禁止」、「著作権保護」、「二重価格の廃止」など、色々な課題が突きつけられている。電話の場合、最近まで China Comm. が独占していたのが、日本と同じように第 2 電電が出来て、利用者にはとても好評だ。今回、携帯電話を利用している人が多いのに驚いた。ミャオ君の携帯電話の呼び出しは何故だか「トルコ行進曲」。車の中や、会議中に、けたたましくこの曲の呼び出し音が鳴るのには笑ってしまった。

10時半頃、ホテルに戻りテレビを見た。見たというより、どんな番組があるか見てみた。通常の1-10チャンネルの番組以外はほぼ上海と同じく、38チャンネルまで見る事が出来た。Vチャンネルでは上海同様、日本の音楽をやっていた。

11時から12時過ぎまで旅行記を書いた。1時前には寝て7時に目覚ましで起きる予定が、朝の6時に、ご丁寧にもモーニング・コールで起こされた。後で聞いたらセンター長が頼んだのを、頼んでいない私まで起こしてくれた。お陰で睡眠不足。

1月16日(水)

6時に起こされた。冗談じゃない、ともう一度寝ようとしたが眠れないので起きることにした。荷物を整理し、スーツに着替えて食堂に行った。皆、既に来ていた。パフェ形式の朝食。お粥が美味しい。豚まん風の小さいのも。

8時までにチェックアウトを済ませる。一泊、280元はとても安かった。部屋は立派だし、綺麗だし、ベッドはキングサイズだし。場所もとても良い所なのに。やはりまだここは田舎なのだ。このホテルには江沢民主席が訪れた時の写真がロビーに飾ってある。彼の写真は上海の研究所でも、このホテルでも、また、これから見学に行く研究センターでも見た。共産党主席の役割は広い中国を隈なく周り、顔を見せ、激励することであろう。ロビーにはその他、李鵬や朱榕基の訊ねた時の写真も在った。その他、「全国共産党書記長会議」などと書いた集合写真などたくさん飾っていた。昨夜、食事の前、これらの写真をシゲシゲ見

ていたら、ザンが「この横には、今日、宿泊したお前の写真が飾られる」と言ったので。「よし、それじゃ、中国征服を考えるか」と答えた。

バンで20分ほど走り、市の北東にある研究所群に来た。ここには10ほどの研究所があり、その中の工学物理研究所【写真24】に新たにレーザー核融合研究センターが出来た。そこでは、「星光(Sheng Gang) II」というレーザーで実験をしている。また、「神光(Shing Gang) III」のモジュールを製作中である。神光 III は8ビームが1セットで、8モジュールで64ビーム50kJ(?)のレーザーとして2006年に完成予定である。ここのセンター長は北京の張(ザン)が兼任。元々のリーダーは、昨晚、私の横に座ったハン・セン・ペンという一見怖そうな人だ。ザンが44歳に対してペンは年長。

ザンとは、4年半前に北京に一週間滞在して講義をした際、何かと面倒見てもらった旧知の仲。「今度、National High-tech Committeeの議長になったんだって。おめでとう」と言ったら。「忙しくなっただけで、めでたいのやら」のような返事。「とにかく、ホエーさんやペンさん達、力強い先輩が盛り立てくれるから何とか務まっているよ」と言っていた。ザンはブリュッセルのバレスキュー先生の研究室に8年いた。その後、ダームシュタットのスパチェックの研究室に2年。

そんな時、ホエーさんから帰国しないかと声を掛けられ、92年に帰国。IAPCMのICFグループに入った。その後、ホエーさんがNHTCの議長になったのをうけ、ICFのリーダーとなった経緯がある。現在はそのリーダーは核融合研帰りのズーさんが継いで

いる。

センターには真新しい金の看板が掛かっており「中国工程物理研究院、激光聚変研究中心」(Institute of Engineering Physics, Center for Laser Fusion Research: LFRC)と書いていた【写真25】。防塵服に着替え、星光 II の見学から【写真26】。その後、神光 III の二往復増幅器(4-path amplifier)のモジュールを見学。その電源も見た。が、私には余り興味は無い。ここはレーザーが専門の中塚さんが色々質問していた。最後に、センターの前で記念写真。この建物の横で「神光 III」の建物の基礎工事をしていた。たくさん的人力で穴を掘っている。建物は長さ 150m、横が 50m の立派なものになる。

見学を終え、バンでホテルに帰り、ホテルの会議室で 9 時 45 分から会議が始った。真中に口の字型にテーブルがあり、それを囲むように壁際に椅子がたくさんある【写真27】。参加者は中国側 40 人程度か。まず、星光 II による hohlaum 実験の話。Power-point で綺麗な画面を出してくる。ディンさんという若い研究者。実験グループは 45 人。内 25 人が科学者。次も若い研究者でリーさん。ターゲット製作の話。ターゲット製作グループは 40 人。内 10 人が科学者。上海の実験用のターゲットもここで作っている。米国の GA と同じだ。3 人目は神光 III のプロトタイプの話。仏蘭西の LMJ のプロトタイプが LIL に対し、ここでは TIL (Technology Integrated Line) の略称で計画を進めている。01 年で第 2 段階の TIL システム統合実験は終了しており、02-06 年で全システムの建設を行う。

11 時から日本側の話に移った。まず、セ

ンター長が全体の話。上海でも聞いたので、私はこの間、昨日までの出張記を書いていた(そう、内職)。お陰で、かなり書けた。今回は飛行機の中でもズーと書き続けたので、帰国した時には昨日までのがほぼ書きあがっていた。センター長の話に沢山の質問がきた。結局、この後、昼食となった。昼食はホテルの別室に用意されていた。

昼食の後、再開の 1 時半まで少し時間があつたので、車で直ぐの「富楽堂」の見学にハンさんが連れて行ってくれた。ホテルを含むこの周辺は「富楽山風景名勝区」と地図にあり、公園になっている。三国志で有名な蜀(しょく)を興した王、劉備玄德が彼の部隊を連れ、この地を自分の国にしようとやって来て、地元のナントカ言う部族長と会見した場所が綿陽の地。それを記念して建てたのが富楽堂である【写真28】。門を入ったところには池があり【写真29】、その橋状の階段を登ったところに劉備の 5 将軍が馬に乗った大きな銅像がある。その先にある、一見、お寺風のお堂には、右に劉備とその将軍達。左に、地元のナニナニ将軍達。劉備が威だけだけにこの地の明け渡しを要請する場面が銅像で再現されている【写真30】。

調べてみると、劉備が王位についていたのは 221 年から僅か 3 年間。そして、蜀の国が魏に滅ぼされて崩壊するまで僅か 43 年間(221-263 年)である【資料2】。にもかかわらず、劉備、孔明と有名なのはやはり「三国志」という史書や「三国志演義」という歴史小説が残っていたお陰であろう。このたび、中塚さんは三国志を読み返そうと、持参したとのこと。

さて、急ぎ足の見学を終え、会議再開。中

塚、田中と来て次が三間さん。Power-point を使おうとするがなかなか使えない。三間さんのトラブルがいい休憩時間になり 20 分ほどかかってようやくスタートした。夕食の時、三間さん曰く「あれも計算の内。私の戦略(strategy)だ。皆、疲れているだろうから、あのようにして休憩時間を作ってあげたのだ」と。三間さんの「strategy」という表現に驚くミャオ君に、「Strategy ですって。きっと、その日本語訳は『破れかぶれ作戦』になるでしょうね」と、私。

三間、長友と続いた。ザンの質問に、三間さんが「10kJ で点火実験が出来る」と答え、ザンが目を丸くして驚いていた。私も驚いた。そこで、「私は Prof. Mima ほどレーザー核融合に関し楽観的ではないので、レーザー核融合の次は何かを考えている。これからその話をする」と言ってレーザー宇宙物理・核物理の話喋り始めた。私が最後で、これで両者の発表は終わり。その後、休憩も無く（先ほどの三間さんので充分とザンが判断したのだろう）今後の研究協力について話し合いに移った。中国側から具体的な共同実験のテーマが 2 件、提案された。三間さんが予算の許す範囲で云々と答えていたら、ザンが「金のことは何とかするから、物理のほうが重要だ」と発言。一本取られた。中国側は日中協力の予算以外に National High Tech. Committee が相当な額の予算を持っており、ザンの判断一つでどのようにも使える。

会議は 4 時半ごろ終了し、ホテルの前で記念撮影をし、皆と別れた。実は私は家の都合でここで別れ、北京には同行しない。ここでザンに会うとは思っていなかったの、年末にザンにメールで「残念ながら北京で会えない、またの機会に」と書いた。

そしたら彼から「お前の都合の良い時にいつでも北京の応用物理・計算科学研究所 (IAPCM) に滞在してくれ。今度は 1 ヶ月か 2 ヶ月くらい滞在してくれ。IAPCM がいやなら精華大学に部屋を用意する」と、メールがあった。その件についてお礼を述べた。少し身の回りが落ち着いたら、好意を受けることにしよう。

このようにして皆と別れ、例のバンで 200km 離れた成都に向う。さすがに皆疲れていて寝ている。バンはドンドン車を追い越しながら 140km/h も出ているかと思うスピードで走った。7 時前に成都の北の高速道路料金所に着いた。それから、町の中心に近い今晚のホテル、Holliday Inn Changdu に着いた。26 階建ての何とも立派なホテルである。五つ星。チェック・インして、送ってくれたミャオ君、運転手さんと一緒に 2 階のレストランで夕食を取った。このホテル、料理の中身意外は全てアメリカをそのまま持ち込んでいる感じだ。一階では英語のポップス調のライブをやっている。

食事も終わり、皆と別れ、私は市内見物に出かけた。Holliday Inn は外から見るとイルミネーションもあり、ここが中国なのかと思ってしまう。出てすぐに百貨店が何軒もあり、営業時間が 9:30-22:00 と書いてある。入ったのは 9 時半頃。急ぎ、昨夜飲んだ中国 4 大銘酒の四川原産のものを探した。あった。288 元だ。カードで買おうとしたが、カードは使えないと言われ、30 ドルを元に替えてもらい、手持ちの金と合せて買った。この後、CD を買おうとしたが、欲しいのが見つからなかった。町を歩くと、子供の花売りが見慣れぬ程度で、日本の夜の町と変わらない。

中国経済の急成長には驚いた。多分、成都の町など10年前はタダの田舎町であらう。それが、百貨店の一階にコスメチックのコーナーが陣取る現状。変化に対する若者の柔軟さは大変なものだ。多分、価値観の世代ギャップは相当なものではなからうか。

10時過ぎて、大きな店はほとんど閉まってしまった。もう少し町の様子を観察しようと、今度は反対方向に歩いてみた。しばらく行くと、道横に門があり、中が賑やかだ。入ってみると、日本の縁日の屋台が並ぶ通りと同じで、色々な食料を売っている。鳥の丸のままの干物など。さらに奥に行くと、道路にテーブルを出した食堂が沢山ある。この時間に仕事が終わった人や、これから、夜間工事に出かける人など、たくさんの人がいきれでムンムンした感じである。

ホテルに帰りテレビを見たら、ほとんどアメリカの世界。NHKまで日本語でやっている【資料1】。アメリカはベトナム戦争にコーラの自動販売機を持参したと言われてるように、何処に来てでもアメリカ流にしてしまう。もっと、「郷に入りては、郷に従え」というか、異文化を吸収する楽しさに気付いても良いと思うのだが。第2のオサマ・ビンラディンが出る前に、そう変わって欲しいと願いつつ、「無理だろうな」と思ってしまった。

では、日本の場合はどうなのだろうか。日本は米欧ばかり見ていて、文化も米欧中心。アジアの盟主を目指すはずが、アジアのことをどれだけ知っているのだろうか。少なくとも、アジアの現代音楽や有名番組など放

送局が意識的に番組を組むようでない、そのような雰囲気醸造していくことは出来ない。アジアの人は日本のことをいつもよく見ていることを意識するべきであらう。

朝6時45分にロビーに集合し、後一日ここに滞在する中塚さんに「地球を歩こう：四川」を渡して、タクシーで空港に出かけた。私を除く4人は、今日は北京で討論。私は、北京経由で帰国する。北京空港で空港建設補助料金90円を支払い、ANAの160便で夕方5時頃、関空に着いた。

【追記1】

中国、100年経済発展論。韓国が80年代急激に経済成長し、一時、「日本の次は韓国だ」と、アメリカ、日本で騒がれた。ところが、その成長が安くて勤勉な労働力に依存しており、労働争議がさかんとなり、労働者の給料が急上昇した時、経済破壊が訪れIMFに泣きついたことは記憶に新しい。多分、現在、中国の経済特別区（沿岸15特別区）は、生産性の向上に付随して、人件費の高騰、生活が豊かになっていっている。韓国と違うのは、地政学的に奥が深いこと。上海の人件費が上がれば、簡単な産業はもう一つ奥地の、第2次経済特別区に安い労働力を求める。そこの生活水準が上がれば、その奥に移動する。たぶん、これを10回は繰り返せる。従って、韓国が経済攻勢を10年しか維持できなかったのに比べ10年を10回で100年は維持できるのではなからうか。しかし、100年後、中国全土が上海のようになった状態なんて、考えるだけでぞろぞろ怖くなってくる。

【追記2】

結局、成都の見物はする時間が無く、大変残念だった。ここには、劉備・孔明を祭った祠堂（しどう）がある。また、杜甫が戦火を逃れ、晩年、詩作にふけた家の跡もある。一日時間が欲しかったが、仕事で来ているので仕方が無い。三国志を手に、四川大学を翌日訪問した中塚教授は成都を満喫できたであろうか。もちろん、満喫しているに違いない。実は、中塚さんが翌日乗る予定であった飛行機は濃い霧のためかキャンセルになったそうである。天から降って来た一日の休暇。さぞ、諸葛孔明などの薫陶を受け、中塚教授の智謀に磨きがかかって帰国してくることと思う。

地図説明

地図 1：中国は広大である。大阪から 2000km で上海、緯度は種子島辺り。温かい。そこから、1800km 内陸に、ほぼ同緯度で移動したところに成都（チャンデュー）がある。成都是広大な四川盆地の中にあり、海拔 500m。昔から、農作物も豊かであった。そして、北東に 1700km 戻ったところに北京がある。今回は中国近代化の象徴的トライアングルを訪問、経由した。中国ではレーザー核融合研究を国家プロジェクトで推進しており、このトライアングルが、理論（北京）、レーザー装置（上海）、実験（成都）に、歴史的な理由でなっている。

地図 2：上海市（この範囲が経済特別区）の地図。上が東、左が北に注意。左に大きな揚子江が東シナ海に流れ込む。そこからの細い支流、黄浦江が私の泊まったホテルの前を流れていた。その対岸にアジア一高いテレビ塔がある。上海の新空港「浦東国際空港」は東の外れ、東シナ海に面して建設された。昔はこの周辺は湿地帯であった。訪れた研究所はホテルから 30km ほど北西の嘉定区にあった。

地図 3：成都市とそこから 200km 北北東に行った綿陽市。訪問した研究所は綿陽市にある。成都新空港は市の南西、双流にある。成都に着いた日、途中の三星堆という遺跡の見物をした。

写真説明

写真 1：母が 11 歳まで住んでいた「北海

寧路」に辿り着き、その道路標示を見て思わず喜ぶ。

写真 2：この一角には中国海軍東洋艦隊の司令部があった。かつての日本海軍・陸戦隊基地跡の利用か。

写真 3：現在郵便局の車庫になっている地点が、かつて母が住んでいた住所番地「保原坊」だ、と地元の老人が教えてくれた。既に家はなくなっていた。

写真 4：100m ほどしかない「北海寧路」の 30 年台を残した一角。70 年前はいかにモダンであったろうか。

写真 5：「北海寧路」から歩いて 5 分ほどの「四川大路」大通り。戦前の日本租界地のメイン・ストリート。両側に、やはり、30 年代の建物が今でも使われていた。

写真 6：30 年代に出来て、巷の噂になった当時の超高層ビル（24 階建）。現役でパーク・ホテルとして使われていた。

写真 7：私の泊まったホテルの部屋（14 階）の窓から撮った 3 日目の朝の景色。2 日目はスモッグが深すぎて写真にならなかった。前を流れるのは揚子江の支流、黄浦江（川）。左、2 つの球を挟んだ塔が、東方明珠塔。この上の丸い部分に回転レストランがあり、初日の夕食はここで食べた。その右、霞んで見える高層ビルは 88 階建てのビル。写真中央の川沿い緑部分が「バンド」と呼ばれる夜景の綺麗なところ。

写真 8：さらにカメラを右の持ってゆき撮った街中心部の風景。古い建物の間に近代的高層ビルが立ち並ぶ。

写真 9：中国のレーザー製作の拠点、「上海光机所」の門の横にて。

写真 10：門を入ったところの光景。

写真 11：会議が始る前の様子。我々と中国側要人は中のソファに座り、それを、聴講者がぐるりと囲んだ。

写真 12：昼食時のスナップ。

写真 13、14：午後からは実験室の見学。実験室に入る前、ブルーの電光掲示板に、組織や構成員の説明があった。その一部。

写真 14：科技人員（科学者と技術者）が 98 人、内、高級科技人員（博士号をもつ人員？）が 45 人。また、博士課程学生が 31 人。修士（？）学生が 53 人。

写真 13：「高効率レーザー技術と物理重点実験室」の組織図。私たちのホスト、リンさんが主任。

写真 15：その奥の部屋にあった、神光 II レーザーの模型。これを使って、あらかじめ丁寧な説明をして、その後、防塵服に着替えレーザー室に入った。

写真 16：中国のレーザー核融合研究は省庁が管轄しているのではなく、中国共産党に直属した国家プロジェクトである。実験棟の前には真新しい看板がかかっていた。このプロジェクトは中国共産党 53 年の歴史の中の 863 計画（?）。5 年前、北京で聞いた時、このような直属の国家プロジェクトは 17 計画が推進されていると聞いた。磁場核融合は科学省原子力局の研究で、中国のレーザー核融合の偉いさんに言わせれば「格が違う」とのこと。なぜかは明白

ですよね。

写真 17：実験室内には 86 年、当時の国防大臣の筆による「神光」の掛け軸があった。

写真 18：ターゲット室には 2 つのチャンバーがあった。手前が、X 線レーザーや基礎実験用、奥が直径 1.5m の爆縮用のチャンバー。なかなか、ハイカラな配色だ。

写真 19：会議も終わり晚餐の光景。

写真 20：月曜夜 10 時頃の上海の銀座「南京大路」のホコ天。

写真 21：火曜日、1800km 奥地の成都に着いて、ミャオ君の案内で 200km 北北東にある研究所に向かう途中の遺跡博物館「三星堆」にて。このような、中国黄河文明とはかけ離れた青銅器文明が 3000 年前、四川省に存在していた。まだ、謎の部分が多い。

写真 22：博物館に接してあった茶店で 50 元のお茶を頼んだら、若者が 7 人、着替えて古代の中国楽器を演奏してくれた。

写真 23：火曜日夕方、研究所のある綿陽市のホテルに着いた。15 人程の中国人関係者の歓迎を受け、夕食。その後、私は希望して街中の見学に行った。人口 66 万人の綿陽市は国家が一大電気製品工場の拠点に開発を進め、大きな電気機器関係の会社（会社）がたくさんあった。後一月で正月（旧）ということもあり、街中は 10 時でもこのように電飾に満ちていた。

写真 24：水曜日、朝、見学から始った。西南工学物理研究所の建物。

写真 25：その右手にはレーザー実験棟がある。つい最近、「レーザー核融合研究センター」として独立。所長は National High Tech. Committee のザン委員長が兼ねる。

写真 26：星光 II レーザー装置の見学。この部屋に、神光 III の増幅器モジュールもあった。

写真 27：見学を終え、ホテルに戻り、会議が始った。まず、中国側 3 人の報告があり、その後、日本側はセンター長の報告から始った。

写真 28：昼休みにホテルの直ぐ近くにある、「富楽堂」を見学した。この綿陽の地は 1800 年前、漢王朝の再興を誓った劉備玄德が彼の軍を従え中原から辿り着き、成都の地元の軍の将軍達と面会し「成都明け渡し」を強要した地である。その故事を記念したお堂。

写真 29：門を入れて一番奥に、手前の劉備の 5 将軍の銅像に見守られるように、お堂がある。

写真 30：お堂の中には、今まさに地元の軍の将軍達（左側）に、明け渡しを強要する劉備（手を上げてる人）とその将軍達の銅像があった。

資料 2：三国鼎立の時代は僅かに 40 年程でしかないのに、「劉備玄德、諸葛孔明」がとても有名なのは、「三国志」、「三国志演義」という本のお陰でしょう。

資料 3：帰国した日の朝日夕刊に、まさに今訪問から帰ってきた中国のスモッグの衛星写真が一面に掲載されていた。スモッグのために中国の北から上海以南を含む海岸線がかき消されている。北朝鮮東部の海岸線の鮮明度と比較すると分かりやすい。上海やその北部が特にひどい。この灰色の粉塵は偏西風に乗って韓国や九州に流れてきている。これで雨が降れば、酸性雨のため日本の森林が破壊される危険性がある。何とかしてよ中国さん。悲痛な叫び声である。

資料説明

資料 1：最後の日、成都で宿泊した Holliday Inn のテレビ案内。CNN, NHK, TV5, BBC その他、米国欧州系の番組がたくさんあるのには驚いた。米国人は世界の何処にいても米国スタイルを保持したいのか。

中国訪問記への中塚正大教授からのコメント

【同行した中国通の中塚教授から、本原稿に対するコメントを頂いた。大変貴重な情報(訂正や補足説明など)を含んでいるので、本人の許可を頂き、付録として掲載させていただくことにした。書いた原稿にコメントを頂くのは大変嬉しいものである。例えばそれが辛口であろうとも。(高部)

02.2.11】

高部さんが面白い訪問記(最新中国激光聚変研究事情)を書かれた。私にとって上海は数回目だし、成都にも6年前に訪問しているので友人も多く、楽しみの訪中であった(田中和夫リーダーに感謝します)。しかし高部さんの「見てやろう」根性には感服した。会議中でもパソコンにメモ魔っているし、成都から帰国につく早朝のロビーでも書き続けていた。大きな世界地図や「地球の歩き方」数冊、夜の街を徘徊する好奇心、これらは科学者精神と通じるものがあるのだろう。ちょっとコメントして高部さんの広知識を修正するのは年寄研究者の権利でしょう。

まず2ページ左中、ホテルのあったのは上海市街地の北外れの市中心区、黄浦江の西側、橋をわたると浦東新区に入る。新区は10年前には何も無い荒れ地であった。今はその海岸線寄りに新空港が出来、新区は住宅街とビジネス街に変身している。10年ほど前に香港の奥のシンセンで会議があった時に、経済特別区の走りとして猛烈な建築ラッシュ(この時は数10メートルの建物でも外部足場は全く竹材ばかりで驚愕した)を経験したが、今回も同様に既に出来上がった新都会を見る気持ちは複雑であった。

4ページ左下。文化大革命の時に35—45才ぐらいの研究者は多くが批判にさらされ、例の三角帽子をかぶらされ街を引き回されたと故 Deng Xi-Ming 先生に聞いたことがある。悲しい顔をされたのが目に残る。以前に成都で講義をした時の若い研究者達が今は殆どが教授になっており、神光 III の試験と建設に携わっていた。

5ページ右中。社会主義国の人たちはロシアも東欧も中国も、女性が職業につくのは常識である。聞いてみただけ、保育制度が違うのだろうか。教育(高等教育も)や医療制度が国の負担になっていることも関係しているか。

同じくその下。高部さんは「逆転層」を知らないらしい。レーザーレーダーの研究をしていたレーザー研の古手には常識の知識です。理化学辞典によると「気温逆転とも言い、対流圏内で、特別な条件のもとで気温が高さとともに増す現象をいい、気温にこのような逆転のおこっている層を逆転層(temperature inversion layer)とよぶ。地面付近の空気がいちじるしく冷却されるときに地面のごく近くで生ずる接地逆転。暖かい気塊が冷たい気塊の上の上がったときに生ずる前線性逆転、高気圧の中の空気のいちじるしい沈降によって生じる沈降性逆転などがある。接地逆転層ができると、地上から放出された大気汚染物質の上空への拡散が妨げられるので、スモッグが発生しやすい。」とある。これがドウタラコウタラの内容です。

6ページ右上。所内に食堂はありました。100人ぐらいが入れるもので、入りきれないから自分の部屋へ持って帰る人もい

るのでしょうか。別の時、杭州大学の客員用宿舎で一週間過ごした時のこと、宿舎の横に学生寮があって、朝の6時頃には小さな音の音楽がキャンパスを流れ、時間が経つにつれて音量があがり、終にとても寝ていられなくなります。瑤瑤の大きな椀と大さじを持った学生が食堂へ向かっています。中国ではよく見る朝の風景の一コマです。みんな道路わきにしゃがんで食べてるよ。

7ページ左下。高部さんの冒険心。中国語は良く知られたように四声があり、同じカナ書きの音でも4種類の発音があります。彼は10文字の発声をしたので100万種類の言い方があったのでしょうか。御苦労さんでした。

9ページ右上。中国の陶器はお勧めです。10元もだすと結構良い蓋付きのお茶器があります。問題は安い割には重くて、持って歩くのがいやになることです。高部さんも例にもれず、途中のバス旅行中、何度も「これ200元で買わない？」って言っていました。でも後日、美味しい焼酎を手に入れたので、それで飲めると機嫌が直りました。彼は土産物で詰まった小さなバッグを3つも抱えて旅行しました。

11ページ左中。綿陽は MianYang と思う。それにしてもテレサテンには驚いた。私は彼女の顔を知らなかった(?)ので、ちょっと可愛い歌手の顔を見てCDに出たものです。懐旧名曲精選/トウ(Deng)麗君とありました。その時求めたものに「道之楽(道教の音楽)」「廣東楽(広東の音楽)」があります。みんな中国!!って感じです。

14ページ左上。調べてみると、花(hua)は花ですがいろいろ意味が多く、花和尚(hua-heshang)はなまぐさ坊主のこと、公子(gong-zi)はぼっちゃんのことでした。花花公子は、まあよく遊び回るぼんぼんと言ったところでしょうか。韓国では「花郎道(faran-tou?か)(両班制度での青年以前の若者の教育方法)」という言葉があるので関係あるかと思いましたが、どうでしょう。

14ページ左中。携帯電話は日本よりもインフラの無い東南アジアで普及しています。各所に有線を張ったり電話交換所を建設するより安上がりだからです。10年前には電話は機関にしかなく、道ばたの屋台に公衆電話があっておばちゃんが店番でした。光机所のリン教授が「家に電話がついた」と自慢げに話し、名刺をくらたことを思い出しました。名刺の番号欄の(0)は仕事場で(H)は自宅です。共産圏では情報の人民化を恐れて電話を普及させていなかったとも思えます。でも今や東海岸では自宅でも日本の衛星放送が見える(チューナーが要るが)ので情報を国家が独占できる時代は終わったでしょう。(北朝鮮のラジオのチューナーが日本語短波放送を聞けないようにハンダ付けされているといった話もあります。)

15ページ左上。普通語(PuTongHua、共通語)では、星光はXingGuang、神光はShenGuangです。

同 左下。中国工程物理研究院(CAEP、たぶん Chinese Agency of Engineering and Physics)というのは科技庁のようなもので、中国科学院(Science Cinica、科学教育省か)下にある上海光機所とは所属

先が異なります。「激光聚変研究中心」は Research Center of Laser Fusion, RCLF です。この 300 人は完全に西南核物理化学研究所(残り 600 人)から分かれたのでしょう。ICF 委員会(14 の Hi-Tec 委員会のひとつ)が作られた過程で全国の主要な研究所にいろいろと組織が重複して設置されているようです。上海の「高功率激光物理国家実験室、National Laboratory for High Power Laser and Physics, NLHPLP」や「国家 863 計画、高功率激光技術與(and)物理重点実験室」などもそれらのひとつでしょう。

16 ページ左中。「ナントカ言う部族長」というのは劉璋のことです。漢室(皇帝一族)の一員であった劉璋は気の弱い男で益州長官(牧)を続けるに足らなかった。そこで部下が劉備玄德に助けを求めた。この会見は研究所の横を流れる河の畔であったとされる。公園に飾られる所以です。一時劉璋を助けていた劉備はその後彼を滅ぼしてしまう。えらい時代でした。「ナニナニ將軍」について書くと紙数が足りない。

18 ページ左上。次の理由で「地球の歩き方：四川」は役に立たなかった。四川大学訪問中、案内してもらっていた季さん(四川大学博士課程)の携帯にレーザー研から電話が入り、帰りの便はキャンセルされた。翌朝 7 時発の青島行きで、北京へ向かったみんなと合流することになっていた。スモッグのために飛行機が降りられない予測で、機体が無いので飛べないと。もう夕刻の 4 時を過ぎていた。すぐにホテルに取って返して飛行便探しが始まった。さすが Holiday Inn でホテルマンと旅行社はしっかりしていた。いろいろ探した挙げ

句、すぐに 20 時の便で北京へ飛び、一泊して早朝 8 時の便で青島へ向かうことにした。北京のホテルに入ったのは 23 時を廻っていた。でも無事に帰れたのは緊急連絡の手配をしてくれた善塔さんと壽崎さんのおかげでした。謝謝。

結局、高部さんが期待したように、もう一泊して諸葛孔明の教えを聞く機会を失った。ただし、すでに 6 年前に武公祠堂は訪れてはいたが。さて、この文が情報公開として役に立つことを祈ります。今度行く時はもっときれいな中国を見たい。彼等は自分で国をつぶしている…。ここまでにしよう。